

# 浦山桐郎さんの想い出

前田陽一

昨年、五十五才の若さで急逝した映画監督の浦山桐郎さんに初めて会ったのは昭和四十年、脚本家の石堂淑郎さんの結婚披露パーティであった。私はその前年に「にっぽんばらだいたす」という映画を作って監督になったばかりであった。

浦山さんは既に「キューポラのある街」「非行少女」の二作品を作っており、いずれも大変に好評で、まぶしいような存在であった。その浦山さんが私の処女作をとて賞めてくれているというのを耳にしてうれしく思っていたし出身地が播州の相生で、私の生れた竜野のすぐ近くということもあって親しみを感じ、機会があれば会いたいと思っていたのである。

パーティで立ち話をしていると、共通の知人の名前がひよこひよこ飛び出してくるので互にびっくりした。たとえば詩人の金田弘さんである。この方は、私が高校時代にブンガク少年であった頃から私淑しているかたちの郷里の先輩であるが、浦山さんも旧制姫路高校時代によく金田さ

んの家に入入りしていたらしい。そちらは歌人であった浦山さんの父上と金田さんが昵懇であったということからのつながりのようである。

パーティの後、二人で飲みに行った。安い飲み屋をはしごして、最後は新宿の餃子屋でバイカル（安くて強い透明な中国酒）をガブ飲みした記憶がある。この後も何回か浦山さんと飲む機会があったが、必ずといっていいほど、餃子屋でバイカルを飲んでい。もとより貧乏な監督二人が飲む場所として理にかなっていたわけだが、戦後の経済成長に落ちこぼれていく階層にいつも優しい眼をそそいでいた浦山さんの作品と、戦後の焼跡のバラックの中に原点をもつ「餃子でバイカル」という酒の飲み方が妙にぴったりして、何となく浦山的であった。

その夜はしたたかに酔って浦山さんのアパートで泊めてもらった。浦山さんは当時の映画界の三大酒乱の一人に算えられており、私は多少怖れをなしていたが、私にはそんな片鱗は全く見せず、随分気を使ってくれて優しくかった。

—DKの畳の部屋の方は真中に沢山の蔵書をつまんだ本棚を列べて二つ部屋に仕切っており、その狭い部屋のコタツに入ってビールを飲んだ。浦山さんは、本棚ごしのもう一方を指して、照れくさそうに「あっちは女房とゴシゴシやる部屋です」といった。

モーツアルトのレコードもかけてくれた。浦山さんのモーツアルト好きは有名だが、私も好きなのである。浦山さんが、かつてモスクワ映画祭で賞をもらったとき、帰りに東欧の方面を旅行して、モーツアルトの生地ザルツブルグも訪れている。その紀行文を読んだことがあるが、ザルツブルグの印象を「播州竜野にそっくりだ！」と書いていた。彼は幼い頃、金田弘さんに言わせれば「ニイチェにとてもよく似た風貌」の父上に手を引かれて、相生からしばしば竜野を訪れたらしい。そのときの山と川に囲まれた静かな城下町の印象が夢のように残っていてザルツブルグのたたずまいと重なって見えたようであった。その父上は浦山さんが高校三年の頃、自殺なさったという。

初対面で人と初めて酒を飲んで泥酔のあげく泊めてもらった翌朝などというものは、とても具合の悪いものである。忘れられないのは、そういう私側の心理と生理を察した細かくもさりげない気の配りようであった。（勿論、奥さんの絢子さんをふくめて）まずは、冷たい水に葉緑素を少々たらしたやつでカラカラの喉をうるおさせてくれてから、

熱い紅茶が出、そしてビールを出して当方の面映ゆい気持を楽にしてくれ、適当な間をはからって、ごく少量の熱い煮込みうどんが出た。これらが私の気分と体の具合に実に精妙なタイミングでいちいちびったりきたのであった。私が帰るとき、浦山さんは奥さんに雑誌を買ってくるからといって小銭をせがみ、「またパチンコでしよう！」とどならねながらも百円玉をいくつか手にして、私と一緒に表に出た。駅の近くまでくると、真直ぐ向いたま、チョイと駅の方へ指をやって「あれが駅です」さりげなくさういつてスタスタと歩み去った。あれは、私に（駅まで送ってもらっている）という気持の負担をかけないための演出であったと私は思っている。

浦山さんと最後に会ったのは昨年の冬であった。私が成城学園前という駅で切符を買おうとしていて偶然に出会い、そこへまた浦山さんの映画にもっとも理解があり、私とも親しい作家の長部日出雄さんが改札口を出てきて、奇しくも三人が鉢合わせをしたのであった。早速、近くの店で飲み、長部さん宅へ行って飲み、強引にす、められるま、泊めてもらうことになって浦山さんと寢床をならべて寝た。浦山さんと飲むのは何年ぶりかのことであった。このときも、妙に多弁になっていた私の話をにこにこ聞いてくれて、ついに浦山さんの酒乱ぶりは見ずじまいである。

（松竹映画監督）